

「草の戸も」の解釈諸説の批判および紀行本文と句との関係について

宇 和 川 匠 助

(高知大学教育学部・国文学研究室)

(I)

草の戸も住替る代ぞひなの家

(奥の細道)

この句の解釈には、この作品が詠まれた場所、時、それに詠まれた対象そのものについていろいろ疑問が存していたために、これまでに五つの解釈が行われていた。

1. 雑商人が家を借りて、売物を置く所としたので此の句を作ったとする説。
2. 芭蕉の出發により人の住みかわるのを、雑が古い箱を出て、雑壇に移るのにたとえた。
3. 年々雑が箱より出入するを生涯の定めなきにたとえた。
4. 今まで僧とも俗ともつかぬ世捨人の住んでいた草庵にも、新来の住人が雑を飾って春らしくなった。
5. 新来の住人は自分の如き世捨人ではないので、華やかな雑など飾られることだろう。(解釈と鑑賞 250号;「奥の細道の正しい理解のために」中村俊定・宮本三郎・板坂元・山下一海・森川昭)

わたくしはこれらの諸説に対して、若干の批判を試みつゝ「奥の細道」の句と本文との関係を考えてみることにしたい。

(II)

蓑笠庵梨一の雑商人説や、

「頃は二月末にて上巳のせちに近き故に、雑を商ふもの、翁の明き庵をかりて売物を入れ置く所となせしによりて、此の吟ありと云ふ」(奥の細道蓑菰抄、安永七年刊、1778)

其日庵錦江、大藪虎亮、樋口功らの雑の箱説、

「翁の旅立てるにより人の入り替るを雑の箱にたとへたる時節の感情なるべし。」(奥の細道通解、其日庵錦江、安政五年、1858)

「すべて人に限らず器物などを入れておく物を家と云う。鏡の家は鏡箱のことで、また秤箱を秤箱の家、重箱を入れる箱を重箱の家とも称した。ひなの家は雑人形を入れておく箱である。句意はこんな穂者の住むような閑静な草庵さえも、住み替る世間のならわしにもれることなく、他の人と住みかわることになったよ。三月の節句も近づいたが、丁度ひながその箱から移りかわって行くように。」(奥の細道新講、大藪虎亮、昭和26、1951)

「雑をかざる屋形は固より家であるが、雑を入れてある箱でも厨子でも人形を入れてあるのだから家といつてよい。我が草庵も住者のかはる時節に恰も雑人形も函から出て厨子などに入りかはる、というのである。」(奥の細道評釈、樋口功、昭和5、1930)

などの諸説は、荻野清の「芭蕉論考」にあるこの句についての報告や、岡田利兵衛の「奥の細道で残された芭蕉の真蹟」(解釈と鑑賞 250号)などによって今日では問題にならないほど色あせてしまったことはいたしかたのないことであった。

(III)

荻野清著「芭蕉論考」の報告というのは、享保十三年(1728)に松嶺庵麦阿(柳居)の撰んだ「俳

諸「世中百韻」の巻末に七句ひとまとめに載せてある芭蕉の句の中の「草の戸も」の句の詞書についてである。それは、

「はるけき旅の空思ひやるにも、いささかも心にさばらむものむつかしければ、日頃住みける庵を相知れる人に譲りて出でぬ。この人なん妻を具し、娘孫など持てる人なりければ」とあるものでこのことばがきは、はからずも、「俳諧一葉集」(仏号湖中編、文政10、1827)にのせているこの句の詞書と全く同一のものであるが、これは時代的にみて「一葉集」の編者が「世中百韻」に引用する詞書か、あるいわ柳居が見たと思われる古俳書のこの句の詞書を見て、それを自分の纏著に引用したかの、いずれかによると推定せられる。

この荻野清の引用した「世中百韻」の文献としての信憑性については、頼原退蔵も証言しているように十分に信頼のおけるものである。

「『世中百韻』は七部集の撰定者に擬せられ、古俳書に通じてゐた柳居の撰になるものであるから、この詞書もかならずやしかるべき出典に拠つたものとして信憑することができよう。」(奥の細道、頼原退蔵訳註、昭和27)

この荻野清の報告のうらうちとなったものが、岡田利兵衛のこの句の芭蕉真蹟についての報告である。それによると、真蹟にあることばがきには「むすめ持たる人に草庵をゆずりて」とあるのである。

「東北地方の某氏蔵という。この写真(芭蕉真蹟短冊)を一見した。疑うことのできない芭蕉の筆である。ただ筆致が元禄二年次としては繊細である点から後書きかと思われる。けれども古俳人書翰の場合など、相手が女流であると、筆遣いをわざと女様にするのが礼儀だと心得たようであるから、この句もむすめ持った人に贈つたので、女文字にやさしく書いたものかと思う。」(解釈と鑑賞 250号、「奥の細道で残された芭蕉の真蹟」、岡田利兵衛)

こうなると奥の細道の本文にある「住める方は人に譲り」とある人や、支考の「笈日記」(元禄8、1695)の前書に「俗なる人」と漠然とあったために生じた雛商人説や、雛の箱説などの愚劣さがなくなり、それらの説が全く問題にならないものとなったことは両氏の言っている通りであると思う。それになによりもこの前書の迫真性はどうか。旅に生き旅に死なんとした芭蕉の決意のほども十分にうかがわれるとともに、

草の戸も住替る代やひなの家

という句形も「笈日記」「世中百韻」「一葉集」「芭蕉真蹟」ともに同一であって、この句形が奥の細道本文にすえられる前の初案の形であることは明らかである。

(Ⅳ)

ところが雛商人説や雛の箱説に対する上述のような文献的反論以外に反対説がなかったわけではない。それは頼原退蔵と岩田九郎の説が代表している。

頼原退蔵は雛の家を雛の箱とみることについては、用語上その用例がないという理由と、ひなの家をひなの箱ととっては、この句の解釈上から言ってもおもしろくないという二つの理由で反対している。

「奥の細道」を評釈した「菅菰抄」の中に見える一説に、芭蕉のあとへ雛商人が移って来たので、住み主の交替を、雛の納箱に雛を入れかへるのに比したのだといふが、雛の家をさう解するのは、鏡を納める箱を鏡の家、秤を納める箱を秤の家などといふ例に従つたのであるが、雛のいれものを雛の家といった用例はないから、言葉としてすでに無理であり、また一句の解もそれでは面白くない。」(奥の細道、頼原退蔵訳註)

この梨一の前古註批判に托して述べられた頼原退蔵の大藪虎亮・樋口功あたりの雛の箱説に対する

用語上からの反論は、岩田九郎の場合も同様である。だが岩田九郎は更に譬喩の不穏当を説いている。

「雛人形の箱と解すると、句意は、この草庵のような破れ家でも、時節が来れば人も住み替るといふこともあるものだ。丁度雛人形がこれまで納めてあった箱から出て別の箱家に飾られる時節が来るようなものだといふのである。この解にすると箱から箱に移る雛人形に、草庵から他の家へ移る作者をくらべているので、その譬喩があまり穏当でない。また雛の箱を雛の家といった例もまだ聞いたことがない。」（奥の細道の新しい解釈、岩田九郎、昭26）

用語例については、この作品以前の文献にあるかも知れないのだが、それが現在のところ未発見であるということもあり得るので、これは積極的理由にならないかも知れないが、譬喩が穏当でないという意見は聞くべきである。わたくしは譬喩が適切でないというよりもむしろ譬喩があまりにも適切すぎておもしろくないと思うのである。人が家から家に移るのを、人形が箱から箱に移るのに譬喩したのでは当然すぎて、そこに何らの余韻もない。メタファーの天才的詩人といわれる芭蕉の句としては、それではあまりにも単純浅薄なひゆとなってしまう。加うるにこの句が円熟期にある芭蕉の作品であることを考えればなおさらのことである。

かくして雛商人説ないしは人形の箱説は文献的にはもちろん、この句の内容的な解釈上からも支持者を失ったかたちである。

(V)

次にたとえば加藤楸邨の代表しているような、

「草葺のこの家も、世のならひに洩れず人の住みかはる時は来るものだ。かうして旧庵を見ると子を持つ人であろう雛が飾られて自分の住んだ頃といともちがった感じがすることよといふ程の意。」（芭蕉講座 二巻 三省堂）

とする眼前のリアルなひなまつりの景に触発されてこの句が作られたとする、いわば眼前説ともいうべき説と、たとえば頼原退蔵の解釈が代表しているような、

「自分が住みふるしたわびしいこの草庵ですら、やはり住みかはるべき時は来るものだ。しかも今度の新しいあるじは、自分のやうな世捨人ではない。妻もあり娘もあるのだから、折から雛祭のころでもあるし、今までのわびしさとは引換へてはなやかな雛人形なども飾られるだろう。」（俳句評釈 頼原退蔵）

というようにこの句作が杉風の別墅に移る直前とみて、妻子をもった新来者が将来雛を飾るであろうことを想像して詠んだとする、いわば想像説ともいうべき説との対立がある。

この両説の支持者は、眼前説ともいうべきものに、「奥の細道新解」（井本農一）、「芭蕉秀句」（加藤楸邨）、「新釈奥の細道」（木村架空）、「奥の細道評論」（荻原井泉水）などがあり、想像説ともいうべきものに、「奥の細道」（頼原退蔵）、「奥の細道新釈」（三浦圭二）、「近世俳句」（暁峻康隆）、「おくのほそ道」（森 修）、「奥の細道評釈」（志田義秀）、などがある。

ところがこゝに興味あることには、これら二つの解釈の素朴なかたちが、一つは後素堂の解にみられるし、

「古翁松島へ旅行せば、今までに住みたる草庵人に売りたるなり。其の後主は下賤たり、夫婦者の小娘ありて弥生なれば聊さかの雛祭したるをつらく見て、草の戸も住み替る代ぞ、いつか雛祭りする家に成たるよといふ事を、雛の家とはいふなるべし。」（奥のほそ道解、来雪庵後素堂、天明7、1787）

今一つは「菅菰抄」本間契史の書き入れにみられるような解釈である。だから今日の眼前説、想像説の原型はすでに古註にみられるわけで、後素堂の解釈の基礎となっているものは明らかにこの句の詞書であって、それは年代的にみてやはり柳居の「世中百韻」に引用した詞書か、あるいは柳居のみたと思われる古俳書の詞書であったと思われるのである。

(Ⅵ)

このようにこの句の解釈に昔から眼前想像の対立する二説が存するという事は、一つには初案と思われる句形とそのことばがきとの自然な関係が、紀行に句が裁ち入れられた場合に生じた不自然さから生じたギャップのなせるわざであるとも考えられないことはないし、また一つには文句一体の紀行文学としての細道を鑑賞する場合と、短詩型文学として文から切りはなした独立句として鑑賞する場合の立場の相異からくとも考えられるのであるが、それらの問題の検討のためにも、この二つの解釈に対する批判を試みる必要がある。

住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、
草の戸も住み替る代ぞ雛の家
表八句を庵の柱にかけ置く (奥の細道)

とあるのだから、この本文をそのまま読んで忠実にこの句を解釈する場合には、住める方という場所は深川の芭蕉庵であり、したがって留別の百韻の表八句を当時のならわしにしたがって、かけておいた庵の柱もこの深川の芭蕉庵ということになる。次にこの留別吟を詠じた時についても、本文を忠実に読めば芭蕉が杉風の別墅に移る直前とみるのが自然である。そして住める方は人に譲りという彼の庵を譲った人物は娘や孫などをもてる人であった。折から弥生三月ひな祭の頃でもあってみれば、これまで世捨人のような自分が住んでいた庵にも、ひな人形などの飾られて、何となく明るくにぎやかな住居となるであろうと自分の出庵後の将来を想像して、住み替る代ぞひなの家と詠じているのだととるべきだろう。したがってこのように解釈する場合、現実にはひな人形が飾られていないことは言ふまでもない。

ところが細道の本文に忠実とは言えないかも知れないが、この句についてのこれまでの周縁的研究によると、この句が詠まれた事情事実というものは、本文の表現とは必ずしも一致していないように思われる。

芭蕉の心ずもりでは元禄二年の節句過ぎに江戸を出発する予定であったことは、元禄二年正月十七日附兄松尾半左衛門あての書翰、

「何とぞ北国下向の節立寄候而、関あたりよりなりとも通路いたし、しみじみ可申上候」

および同年二月頃と思われる同郷の弟子猿雖あて書翰、

「去秋は越人といふしれもの木曾路を伴ひ、棧のあやうきいのち、姨捨のなぐさみがたき折、きぬた、引板の音、しし追すたか(すがたか)あはれも見つくして、御事のみ心におもひ出候。としは明ても猶旅の心ちやまず、

元日は田毎の日こそ恋しけれ

芭蕉

弥生に至り待佗候塩釜の桜、松島の朧月、あさかのぬまのかつみふくころより北の国にめぐり、秋の初、冬までにはみのおはりへ出候……尚々江戸御下被成候はゞ、節句過には拙者は発足仕候間、それまでに候はゞ懸御目度候」

などでもわかるが、事実は元禄二年三月の杉風詠草、

「翁、陸奥の哥(歌)枕見む事をおもひ立待りて日比住ける芭蕉庵を先破り捨；しばらく我茶庵に移り侍る程、猶其筋余寒ありと、白川のたよりに告こす人もありければ、多病心もとなしと弥生の末つかたまで引とゞめて、

花の蔭我草の戸や旅はじめ

杉風

でもわかるように、奥州方面の余寒のきびしさを知った杉風は、病弱な芭蕉を心もとなく思っ三月の下旬まで、だいたい三月三日から二十六日までの二十三日間、採茶庵に滞在させたのである。だから芭蕉は採茶庵にひきうつしてから、ある時日をおいて再びこの庵からほど遠からぬなつかしい前の住居をたずねてみると、旧庵にはひな人形などが美しく飾られてあって自分が住んでい

た時のように、くすんだわびしい庵とは、みちがえるほど花やかではられなくなっている。その眼前のひなまつりの景に触発せられて無常迅速の感慨を覚え、その結果、この句が生まれたのである。

そしてこのようにひな人形が現実にかざられている客観的な季節の景をふまえて、そこに自己の主観を滲透させるのが、芭蕉の他の多くの作品にもみられる詩法であることを思えば、この事実に即したと思われる。解釈に捨てがたい愛惜を感じるのは自分一人であろうか。

(Ⅶ)

岩田九郎は最近の著「芭蕉の俳句俳文」（昭27）の中で、

「人の世というものは変転極まりないものだという深刻な人生の観方を、この句に寓しているとしたら、目の前にかざってある雛を見て詠んだのでないと、句の感激がうすい。」

と言っている。更に氏の旧著「奥の細道詳講」（昭5）によると、

「小さいこの草庵にも世の変遷というものはあるものだ。住み替って見ると、前とはちがって、今住んでいる人は雛なども飾ってあるよ。さきには佗しい世捨人の草の戸も、今は雛などを飾る家になっているよ。という程の意で、人に譲って後、ふと雛など飾ってあるのを見た時の心の動きをいったのである。」

と言うようにこの句を口語訳して、眼前説をとっているのである。そしてこのように解釈することに非常に強い執着を示しながらもほそ道本文に、「杉風が別荘に移るに」といい、「表八句を庵の柱にかけ置く」と表現されている以上は、事実とはもかくとしても、想像説をとらざるを得ないことを表明している。

頼原退蔵も、

「この句は、一旦芭蕉庵を立ち出でてから自分のあとに引越して来た人が雛など飾ってあるのをのぞき見てその感慨をよんだもので、懐紙をかけたのは杉風の別荘であろうと考える^{*註}人もあるが、事実とはもかくとして、少くとも、この文章を解する上には、さうしたことは必要でないのではあるまいか。」（奥の細道、頼原退蔵）

という説であって、両氏ともこの句の周辺の事実はいちおう肯定して、眼前説に心ひかれながらも、紀行の本文を忠実に読む場合には、想像説によらざるを得ないとする立場である。

「奥の細道」という紀行文学作品はいうまでもなく、本文と句とが過不足なく渾然一体となって相互に映発しあっている散文詩ともいべき芸術作品である。だからこのような文学作品を鑑賞する場合には句と文とを切りはなしてみることとは紀行文学という文学上の一つの様式を無視して鑑賞することになるので、いきおいこの句の解釈が想像説となるのも、やむを得ないことでもある。しかしこの「草の戸」の句は紀行文学にはめこまれたモザイクであるとともに、また短詩型文学として独立した作品としても、とりあつかわれるべき権利を留保しているのであって、この点からみればこの作品の成立した周辺の事実は当然尊重せらるべきであって、そこから眼前説の可能性も出てくるのである。

(Ⅷ)

句と本文との関係について今一つのことが考慮されねばならない。それは井本農一も言うように、「奥の細道」が発句中心に文章が書かれていて、自分の気に入った句をすえるために文章をいぢっているということは、曾良の「随行日記」と照合しながらこの紀行を読めば理解のできる

* 註 「奥の細道創見」（勝峯晋風）によると貧しくいぶせき草の戸（深川芭蕉庵）からきらびやかに飾るひなの家（杉風別荘）に住むことになった感慨を詠じたものとしている。

ことである。

「芭蕉の紀行ではいかに句が重視されているかが諒解されたであらう。紀行は旅の事実を書くための文ではなく、旅の記を通して旅中の句をいかに効果的に提出するかの文なのである。」(解釈と鑑賞 209号, 芭蕉の紀行日記, 井本農一)

「芭蕉に至って、徹底的に発句中心に地の文が書かれるようになったのである。発句を生かし、発句と一体化となる散文の創始、それが俳諧紀行のスタイルの確立となったのである。そうしてその結果は、発句を効果的に紀行にすえるために旅の事実を枉げて書くことも、止むを得ないということになる。(国文学解釈と教材研究, 第二巻 第四号, 芭蕉の紀行について, 井本農一)

そのような創作的虚構が随所に行われていることは、井本農一の指摘している如くであって、それがこれまでの紀行文学の糟粕をなめることなく、この紀行文学が輝かしい成功を収めているゆえんでもある。しかし句と文との全部が全部、成功的な結果をもたらしているかどうかという点については、更に詳細な個々の場合の検討がなされねばならないと思う。そのような一例がこの草の戸の句と地の文との間にみられないであろうか。

(Ⅷ)

それについてまず考えられるのが、この句の初案とみられる句形とそれについていることばがきである。ことばがきはいわば作者のその作品に対する自解文であるのだが、その自解が作品にあまりに強くつわをかましすぎて、自由な他解を制限しているというような場合もあり得ないことではない。

「草の戸も」の句は支考の「笈日記」にあるような俗なる人にゆずりてということばがき、「世中百韻」にある柳居が古俳書から引用したと思われることばがき、あるいは芭蕉真蹟と目される短冊にあることばがきにみられるような軽くすなおな前誓のあとにすえられたのがこの「草の戸も」の句であったことをまず強く思い出してみる必要がある。それが「奥の細道」という芭蕉の意欲的な紀行文学創作にあたっては、「月日は百代の過客にして……」というような芭蕉の世界観人生観を述べた、荘重な冒頭の文章の最後にすえられたのである。こうなるとただ単に「住める方は人に譲り杉風が別墅に移るに」というようなことばがきに対する「草の戸も」の句でなくなって、それらの背後から「月日は百代の過客にして……」の前誓の圧力がのしかかって来ているのである。そのような圧力と切迫感が、「草の戸も住替る世や」のこの句の初案のおおどかさを、「草の戸も住替る代ぞ」と推敲せしめずにはおこなったのではなからうか。それは五月雨をあつめて涼しのあいさつの句を紀行文に裁ち入れるに際して、五月雨をあつめて早しと推敲せしめたほどの顕著なものではなかったとしても、そこに何らかの注意が払われたであろうことは当然考えられることではあるまいか。

「行く春や」の句や日光山の「あらたふと」の句が渾然調和して一句の独立性がおかされることなく、しかも地の文との比重において平等であるような場合、一篇の短篇的構想のもとに文が主となったために一句の独立性という点では即興的に軽い「かさねとは」の句(首良の作ではあるが)のような場合。句の独立性という点では「かさねとは」や「野をよこに」ほど軽くはないが、「夏山に」「しばらくは」などの句が前文によって画竜点睛的に生かされているような場合など、これらはみな紀行文への句のすえ方としてはおのおの成功的な場合といえよう。ところで「草の戸も」の場合はそのいずれに属するのであろうか。

細道発端の文章は、この文章がこの紀行全体をおおうような大文章であるがために、この句が観相的な仏教思想的無常観を内容とする重い句ではあるけれども、やはり前文の圧力には負かされているということは、はっきりと言えるのであって、そこに文と句との間にいくぶんのギャップの生

じるのはいたしかたのないことであった。それは「夏草や」の句の発想の場が直接には義経主従の滅んだ高館を場としながら、藤原氏三代の栄華の前書が強要する間接的歴史の回顧の圧力にも十分身をもちこたえているのとは、ちょっと異なるようである。「草の戸も」の場合の前文は文章があまりにも高踏的で、その前書に句が負けているというのが公平に近いみかたではあるまいか。そして「杉風の別墅に移るに」と言っているが、筆のいきおいでそれにひきつずいていかにも直ちに、細道の旅に出発するような印象を読者に与える心のいさみが感じられるのである。このはやる心の旅の思いから生じた文章のたかぶりが、事実は出発までの二十余日間のゆとりのあった或る日に、实景に即して詠まれたと思われるこの句の裁ち入れにあたって、句と文との間げきを縫いあわせる論理や時間性を顧慮するいとまを、失なわせているのではないかと思わせるふしがないでもない。それは要するにこの紀行の前書が叙事的であるよりも、常に主情的であることに原因していることはたしかなことようである。

(X)

既成の句があってそれに托して彼の世界観人生観を前文としたのはよいが、あまりにも荘重な前文が既成句に力以上のものを要求した結果、そこに句と文との渾融のしかたにすきまを生ぜしめ、それがひいては眼前説に執着しながらも想像説をとらざるを得ないというような、解釈上の二説の対立をもたらす、すきをま作ったのではなからうか。

もちろん前にも述べたように句文一体の紀行文学として、この句をみる場合と、句のみを独立の短詩型文学作品としてみるために、二つの解釈が対立したとみるのがもっとも妥当なみかたとは思いますが、また一面から考えると芭蕉のこの句のすえ方にも多少の無理があったのではなからうか。少くとも表八句をかけておいた庵の柱が深川の芭蕉庵であったか、それとも^{*註}杉風の採茶庵の柱であったか、もつと時間的な関係をはっきりさせておきたかった。あるいはその反対に「杉風の別墅に移るに」というところをもっと漠然とさせて、解釈に対して前書が拘束を加えないようにしておくべきだったなどと無理な注文もしたくなるのである。(1957. 9. 30)

参 考 文 献

校註奥の細道（素庵本并筒屋板、杉浦正一郎編）、奥の細道の正しい理解のために（中村俊定、宮本三郎、坂板元、山下一海、森川昭、国文学解釈と鑑賞250号）、奥の細道菅菰抄（袈笠庵梨一）、奥の細道通解（其日庵錦江）、奥の細道新講（大藪虎亮）、奥の細道評釈（樋口功）、芭蕉論考（荻野清）、奥の細道で残

* 註 杉浦正一郎校註の井筒屋板素庵本の影印本によってみても、「面八句を庵の柱に懸置弥生も」と同行に書かれていて改行されていないところを見ると、「草の戸も」の句のところで「月日は百代」以下の序の文が終っているととれないこともないようである。そうすると表八句以下は次の出発の文につづくので表八句をかけておいたのは杉風の採茶庵の柱となり、草の戸もは句は時間的にみても眼前説に解釈できないことはない。井本氏の「奥の細道通解」には「二度と帰れるかどうか解らない旅であるから、今まで住んでいた芭蕉庵は人に譲り杉風の別荘に移ったのである。そこで「草の戸も住替る代ぞひなの家」の句を詠んだ。この句を発句にして面八句を作って、移って来たこの採茶庵の柱に懸けて置いた。」とある。井本氏の通解の解釈はもちろん眼前説である。なお「奥の細道詳解」（山崎麓、昭5）の説は異色あるものであるから紹介しておくことにした。「表八句が何であるかは本文の切り方で二様にとれる。草の戸も句で文を切ると、この表八句は前の句とは関係がなくなる。前段所引の杉風の文によると、芭蕉は二月中旬に芭蕉庵を人に譲って杉風の採茶庵に移った。そして三月二十七日に出発した。その前夜は宵から門友が集って送別の俳諧興行があったのだからこの時の表八句を採茶庵の柱にかけておいたと見る外はない。又文を草の戸も句で切らずに続けるとしたら、通説通り草の戸も句を立句とした表八句を芭蕉庵の柱に懸置いて三月二十七日に出発したのだと解する外ない。かく解すると杉風の採茶庵に滞在してここから発足したという事実がなくなってしまふ。が一体奥の細道の文は事実忠なる記録ではない。文芸意識の下に書かれたものである。だから事実の異脱は止むを得ない。」これは本文の切り方で、表八句の立句が二つなければならぬとする説である。そして文を切らないで読めば採茶庵滞在の事実が消されてしまうことに注目している点、なかなか興味がある。

された芭蕉の真蹟（岡田利兵衛，国文学解釈と鑑賞 250号），俳諧一葉集，（仏兮湖中編），奥の細道（額原退蔵，能勢朝次訳註），笈日記（各務文考），奥の細道の新しい解釈（岩田九郎），芭蕉講座第二巻（三省堂），奥の細道新解（井本農一），芭蕉秀句（加藤楸郎），新釈奥の細道（木村架空），奥の細道評論（荻原井泉水），奥の細道新釈（三浦圭二），近世俳句（柳岐康隆），おくのほそ道（森修），奥の細道評釈（志田義秀），奥の細道解（来雪庵後素堂），奥の細道の基礎研究（飯野哲二），奥の細道序説（阿部喜三男），芭蕉書翰集（阿部喜三男），芭蕉の俳句俳文（岩田九郎），奥の細道詳講（岩田九郎），奥の細道創見（勝峯晋風），芭蕉の紀行日記（井本農一，国文学解釈と鑑賞 209号），芭蕉の紀行について（井本農一，国文学解釈と教材の研究 第二巻 第四号），奥の細道詳講（山崎盛），など——参考文献の掲載は本論文に引用した順序によった。

（昭和32年9月26日受理）